

JAELE Newsletter

上越英語教育学会通信

The Joetsu Association of English Language Education

December 20, 2021

No. 25

「五十にして天命を知る」

上越教育大学 講師

渡邊 政寿（令和元年連合大学院単位取得）

令和3年4月より、本学で講師としてお世話になっております、渡邊政寿と申します。この度は上越英語教育学会ニューズレター巻頭言という場で貴重な紙面を頂戴し、光栄に存じます。この場をお借りして、自己紹介を兼ねて、今まで考えてきたことを述べさせていただきます。

振り返ってみると、上越教育大学とは深いご縁がありまして、四半世紀以上前に大学受験の際にお世話になりました。現在も我が家の子どもたちが附属学校園で、毎日いきいきと活動させていただいております。また、上越英語教育学会では高等学校の教員として1回、博士課程の学生として1回の計2回、発表の機会を頂きました。感謝申し上げます。

新潟県高等学校の英語教員として27年間で4校に勤務し、実業科、総合学科、普通科、中等教育学校と幅広い範囲の学校を経験してきました。その間に文部科学省 REX プログラムの派遣で1年半にわたってロシア・ウラジオストクの大学生に日本語・日本文化を教える経験もさせていただきました。常に念頭に置いて取り組んできたことは、英語そのものに興味を持ってもらうにはどうしたらよいか、英語を使ってコミュニケーションを図る成功体験を収めるにはどうしたらよいか、結果的に英語の試験ができた、成績がよくなったという思いを学習者が持つにはどうしたらよいかということでした。様々な講演会を聴きに行き、理論書から実用書まで広範囲にわたる本を読み、効果的であると思われるものは授業に取り入れるということの繰り返しでした。その中から国際交流、異文化理解、および英語多読を通じた読解力と作文力向上が私の主な関心事となり、結果的には修士課程、博士課程で研究する対象となりました。連合大学院博士課程では大場

浩正教授にご指導いただき、充実した研究生活を送ることができたことに感謝申し上げます。

学校現場の先生方は、生徒・児童の効率のよい学習成果を求めて、日々研鑽を積まれており、日ごろの実践を通して学習成果も大体思った通りのものが得られている実感はあるのではないかと思います。私の場合は多読の実践がそれに該当しました。授業の様子や学習者にとってアンケート結果からも、手応えは十分にあるものの、学問的には果たしてどうなのかと考えた時、理論を学び、実践の成果を検証し、その効果を理論的に証明することで、学校現場で広く活用してもらいたいと考えるようになりました。それが、高等学校の教員から大学の教員に転身する、大きなきっかけとなりました。仕事として研究ができる喜びをかみしめつつ、教員を志す学生たちに少しでも役に立つ授業を提供できるように、初めて大学の自室ドアにある「渡邊研究室」のプレートを目にした時の気持ちを忘れずに、精進していく所存であります。

これからも実践と研究の往還をしつつ、理論に裏付けられた実践の成果を現場に還元していきたいと考えております。それがこれまでお世話になった同僚の先生方、一緒に学んだ生徒たちに対するささやかな恩返しになることを期待して。



津南見玉公園にて

「経験を宝物に」

上越教育大学 助教
瀧澤 典子

この4月から先端教科・領域学習コースに着任いたしました瀧澤典子です。中学校・高校での教員経験をいかして上越教育大学で教員養成に携わることができますことを、とても光栄に思います。また、教職を志し真摯に勉学に励む学生たちと理解のある経験豊かな教職員の方々、そして豊かな自然にも恵まれ、今いる環境に感謝しております。



上越教育大学において教鞭をとる中でいつも感心していることは、学生一人一人が教育について真剣に考え、いずれ教育現場で働くことを見据えて日々自己鍛錬されていることです。学校支援プロジェクトをはじめ、さまざまな両立がたいへんな時もあると思うのですが、前を向いて生き生きとキャンパス内を行き来されている姿を拝見するたび

に私もがんばろうという気持ちになります。

私が学校で英語を教え始めたのは10年以上前のことで、その頃は大学院の文学研究科に所属し、マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835-1910) の作品をはじめとするアメリカ南部文学を研究していました。アメリカ南部社会における「因習」、「差別」、「宗教」、「確執」、「暴力」、「奴隷制度」、「階級制度」、「騎士道精神」、「同性愛」、「南部方言」、「文体論」など、さまざまな観点から『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885) について仲間たちと長時間にわたり議論をしていました。

その頃は自分が学校で教えることになるとは予想もしていなかったのですが、たまたまご縁があり東京の私立高校で当時「ライティング」の授業を担当することとなりました。集団を教えるのは学部生時代の教育実習以来で、初回の授業ではとても緊張しました。その当時はオールイングリッシュの授業を行うことが推奨されていて、私も一生懸命に英語で英文法の説明をしました。そうしたところ、生徒から「意味ないから英語で授業するのやめてください」と言われたことは今でもよく憶えています。恥ずかしながら、その時の私はこれを「文句」と捉えてしまったのですが、今思えばとても意義深い発言だったと思います。

大学院卒業後は、学校で英語教員として働いていましたが、英語教育について何の専門的知識もなく、研修などで見聞きした教え方を論拠もなく自身の授業に取り入れることを繰り返してい

たような気がします。ただ、みんなに英語を使えるようになって欲しいという思いはずっと持ち続け、その方法を求めて実際に英語が使われている職場や子ども英会話教室で働いたりもしました。しかし依然としてこれといった効果的な教え方は見つからず、常に模索しながら英語を教え続けていました。そのような中、人生の転機が訪れ、教師になって10年目にやっとイギリスで英語教授法を学ぶこととなりました。



留学中、世界各国から集まった同業者の学生たちと学校における外国語教育について情報交換をしたり、現地語学学校でのTAの経験を通して気づいたことは、学習環境や学習者により教え方は必然的に異なるということ、そして、それぞれのニーズに合わせて授業を手作りしてこそ効果的指導に繋がるということです。私たち教師はつい学習者をよそに形式的な目標を優先して授業を行ってしまうことがあります。しかし、かつて私が生徒に「意味ないから…」と言われたように、授業を意味あるものとするために、目の前の学習者たちに理解してもらえるよう創意工夫をすることこそ教師の役目なのかもしれません。そして今、私は一人でも多くの英語学習者たちの目が輝くのを見たくて、あれこ

れ考え試行錯誤できるこのクリエイティブな仕事大好きです。

さて、若くしてミシシッピ川の蒸気船の水先案内人や鋳夫、印刷工、兵士、新聞記者等、多様な仕事を経験し、文豪フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) に「真の最初のアメリカ人作家」と崇められるまでになったトウェインですが、こんなことを言っています：“It is from experiences such as mine that we get our education of life. We string them into jewels or into tinware, as we may choose” (1906)「人生の教育を受けられるのは私が得たような経験からである。経験を連ねて宝石とするかブリキとするかはその人の選択による」(筆者訳)

彼の言うように、経験をその後の糧とするか否かは、私たちの心が決めるのでしょうか。私が初めての授業で「意味ないから…」と生徒に言われた経験は、イギリスで英語教授法を勉強してからというもの、もはや文句ではなく貴重な宝石です。これからもさまざまな経験からできるだけ多くのことを学ぼうとする気持ちを大切に、目指すものへと一步一步進んでまいりたいと思います。そして、そこで得たものを皆様にお伝えしていければ幸いです。

新たな成長へ

大学院 1 年 学校教育深化(文理深化・英語)コース

近藤公哉

大学院に入学してから、桜は散り、夏の猛暑を越え、紅葉も見納めという時期に突入しました。昨年のこの時期は、教員採用試験に合格し、学部を卒業して教員になるか、名簿搭載猶予期間を活用して大学院に進学するかを悩んでいました。また、新型コロナウイルスの影響で5月から11月に延期になった教育実習と学部の卒業論文に追われていたかと思います。その期間に常に頭に浮かんでいたのが、今の自分が教員としての資質・能力を持ち合わせているか否かでした。昨年11月の中学校での教育実習でも、滞りなく実習を終えることができましたが、「来年から働いて大丈夫か」と不安に感じていました。学部は東京の国際系学部で教職課程を履修して中・高の英語の教員免許を取得したため、教育よりは英語に力を入れて学習していました。そのため、教育の全体像に関しては心得ておらず、教育実習中も教育の知識に関して勉強不足な部分があると感じました。そこで、上越教育大学大学院に進学することを決めました。進学後に特に印象に残っているのは「教育方法の理論と実践」の講義で、英語だけでなく、国語や社会など他教科の教育方法や理論を学びました。このことをきっかけに、教科横断的な指導・学習の重要性を感じると共に、これまでは知らなかった他教科の指導法やICTの活用法について学び、教育の奥深さをより実感しました。課題研究フィールドワークでお世話になっている新潟県立高田高校では、現場の先生方の高度な指導技術を間近で学ばせて頂き、教員としての指導技術の向上に努めています。ゼミナールではこれまでは学習してこなかった統語論を学び、修士論文執筆に向けて日々取り組んでいます。

来年の今頃は修士論文完成に向けて取り組んでいると思います。それと同時に、春から教員になるための準備をしているものかと思います。その時、自分自身が自信を持って教壇に立てると

思えるように、残りの期間を大切に過ごしていきたいと思っています。



キャンパス秋日和(令和2年11月29日)

学びの日々

大学院1年 学校教育深化（文理深化・英語）コース
飯田智先

「英語の教員になりたい」。高校生の時、塾で受けた分かりやすく楽しい授業が忘れられず、1年前、英語を子供達に教える道を模索し始めました。そして、両親・祖父母が教員であること、学校が一番英語を伝えられる時間が長いこと、この2つの観点から私は本大学院英語コースに入学し、教員免許取得そして教師を志そうと決心しました。それから約8ヶ月の月日が流れ、今、多忙な日々を全力で過ごしています。ここでは、どのような授業が行われ、どのような仲間がおり、何を考え教員への道を歩んでいるか、その一端をお見せできればと思います。

私は元々、工学部出身で主に数学や通信について勉強をしていました。上越教育大学では英語や教育について学んでいますが、その科目差だけではなく、授業形態の差に驚きを感じています。

“とにかく人前での発表が多い”。それが今まで授業を受けてきて一番の感想です。皆さんは教師を目指しておいて“何をそんなこと”と思われるかもしれませんが、緊張しいで人前にて話すのが苦手で、すぐにテンパってしまう性格の持ち主として、このみんなの前で発表することは難敵・難題です。しかし、～緊張する、発表する、緊張する、発表する～の繰り返しをしていくうちに徐々に人前で話すことに対して抵抗がなくなっていると感じるようになりました。人って慣れるのだなと思うと同時に教員に一步ずつ近づいているなど成長を実感しています。

さらに授業を受けて驚いたことがもう1つあります。それは私が高校生までに受けてきた授業と今学校で教えられている授業は全く違うということです。英語にフォーカスすると、私が中高生の頃は先生が黒板に書いたこと、和訳であったり文構造であったり、必死でノートに写す、いわゆる先生が主体の授業でした。しかし今は生徒が主体であり、生徒自身が考えたり気づいたりする授業が求められているのだなど色々な授業から学んでいます。自分の経験に基づいた、ただ一方的に教えればいいと思っていた私にとって、たった4・5年の間でこんなにも変わっているのかと驚きの連続です。一方で、ワクワクも感じています。どんどん教育方法がブラッシュアップされており、これならばここで学べば生徒にとって意味のある、そして面白い授業を提供できるのではないかと。

私は今、色々なバックグラウンドを持った同級生とともに日々の学生生活を送っています。現職の方、経済学部出身、社会人を経験している、お坊さんの資格を持っている、もっと研究がしたい、など様々です。みんなそれぞれ異なった考えを持ち個性豊かなメンバーです。今まで出会ったことのないタイプです。だからこそ彼らから学ぶことが多く楽しく充実した日々を過ごせています。最後になりますが、皆優しく頼り甲斐のあり切磋琢磨できる、そんなメンバーとともに学ぶことに感謝をします。そして、“生徒にとって英語が将来生きていく上で武器になる”、そんな指導を実現するため、理論に基づいた効果的な指導方法や第二言語習得のメカニズム、楽しさを追求した授業など、今後2年かけて必死に学んでいきたいと考えています。自分の理想とする教師になれたらいいな！

知らなかったこととの出会い

大学院 2 年 学校教育深化（文理深化・英語）コース

小川 瑞貴

実家から車で半日かけて上越にやってきた日から 1 年半、大学院での生活を通して自分が今まで知らなかったたくさんのことを知ることができました。環境の違いは大きく、特に初めて経験する大雪には驚き、スコップを片手に雪国のたくましさみたいなものを感じていました。また、コロナウイルスが流行して今までにない状況に対処しなければならず、入学当時は戸惑うこともありましたが、しかしオンライン授業は、インターネットの活用方法を見出せたり、なにより教育現場で「1 人 1 台端末」環境が整備され活用が始まっている中で、ICT 教育の課題や可能性を考える機会となっています。

新しい経験をしたり、勉強をはじめたりすると、自分の知らないことの多さに気付かされる。それと同時に知る楽しさにも気付かされる…。大学院での学びはその繰り返しです。授業や仲間との意見交換を通して、第二言語習得のためにどのような指導が必要なのか、今どのような教育が求められているのかなどを学ぶことは、自分の教師像を模索する中で多くの気づきを得ることにつながります。さらに、実習などで子どもたちと関わる機会を多く持つことができ、そこでも一人一人異なる性格の子どもとどう関わっていくかなど、新しい発見がありました。

しかし楽しいことばかりではなく、修士論文などでいざ「誰もわからないことを調べるぞ！」となると何をすればいいかわからなくなってしまうこともありました。また、私は大学院の期間を短縮して卒業するため、授業や実習、修士論文などやるべきことが一度に来て頭が追いつかないと感じることもあります。それでも、些細なことでも「そうだったんだ」というような気づきが生まれることで一歩進めたような気がして少し自信につながったりします。



グローバル化や情報化、そして with コロナの時代における今の社会は複雑で予測不可能であり、これ一つで解決できるというようなものはありません。私たちは様々な要素を考えたり、重要なことを見抜いたりする必要があります。そして考えることの原点には新しい気づきがあり、疑問を持ったりもっと知りたいと好奇心の輪を広げていくことで見えてくるものがあるのだと思います。だからこそ授業では **first impression** を大切にして、子どもたちが新しい世界と出会う楽しさを感じられるようにしたいです。

卒業後現場に出た時に理論と実践を生かしていけるよう、これからの院生生活も人との関わりや学びの中での「出会い」を大切に過ごしたいと思います。

大学院での半生

大学院 2 年 学校教育深化（文理深化・英語）コース

加藤良隆

早いもので私の大学院での生活はもう折り返しを迎えていました。入学のことを昨日のように覚えており、時間が過ぎることの早さを実感します。そしてそれは時折、「何も思い出がないから早く感じるのでは？」と自分を不安にさせます。そんな不安を払拭するべく、ここでは大学院生活を振り返らせてください。

昨年の四月に私は上越教育大学大学院に入学しました。入学に際し、地元が上越である私にとって他県の大学で過ごした4年ぶりに上越での生活が始まりました。街並みは少しばかり変わりましたが、それでも地元の安心感があります。学業面では学校教育を学ぶということについていけるか不安がありました。小中高とどう取り繕っても優等生だったとは言い難い私が学校教育を学ぶことのおかしさや後ろめたさから来る不安です。今なおその不安を感じることはありますが、親切な先生方のおかげでゆっくりと歩を進めることができます。コロナの影響でオンライン授業が当初は多く、授業に上手く臨めない不安もありました。対面での授業が大半となった今となつては、あの時に新しい授業の形態を知れたことや、ICT活用の幅を知れたことは貴重な経験になっていると思います。

上教大での生活にも慣れてきたころに模擬授業をする機会がありました。「もう模擬授業!？」と混乱しながら教材を作り、不安いっぱい当日を迎えたことを覚えています。幸い生徒役の院生が授業をしやすい反応をしてくれたおかげで、無事終えることができました。しかし、模擬授業から解放された安寧も束の間、周りの院生による遥かに楽しそうで興味を惹く授業によって不安はさらに募ることとなります。

M2になって中学校へ教育実習に行きました。模擬授業での苦い経験から不安こそありましたが、どこか前向きに取り組めていた気がします。あの時の後悔をどこかで晴らしたい思いがあったのかもしれませんが。模擬授業での反省から生徒が楽しむことや生徒の興味を惹くことを念頭に授業作りを行いました。「授業にゲーム性をどう取り入れるか」、「生徒の最も関心のあるトピックは何か」などと考えを巡らせ、「楽しいから」を学習の動機になるように努力しました。実際の中学生が相手ということもあり想定とは違う方向へ進むこともありましたが、生徒が楽しそうに取り組める授業を少しは出来たと思います。

いざ大学院生活を振り返るために思いを馳せると、到底書ききれないことがわかりました。「色々あったな」と感慨深ささえ感じます。残り半分ほどの上教大での生活をとてつもなく長かったと振り返ることができるように、一日一日を楽しみながら学び続けたいと思います。

英語教育雑感

妙高市立妙高高原中学校長
重野 準司（平成9年度修了生）

連載第3回（最終回）

現場復帰してから現在までの英語教育とのかかわりを振り返って

私は、今、校長として5年目を迎えています。この間、十日町市立松代中学校で2年間、そして、現在の妙高高原中学校で3年目です。教育事務所の英語担当の指導主事を終えて校長になったわけですが、校長になってからも英語教育との関わりは結構濃いものがありましたので、それらを振り返って、雑感を書かせていただきます。

十日町市立松代中学校で その1

平成29年の4月から十日町市立松代中学校の校長となりました。上越市の自宅から距離にして片道およそ42kmの準へき地に位置する全校生徒61名の小規模校でした。実はすぐ隣の松之山は私の故郷です。松代にも親戚がいましたので、故郷に帰ってきたような思いで、本当に嬉しかったことを覚えています。

私は十日町市教育研究会の英語部長という役割をいただきました。それは私が英語の専門だからという訳ではなく、松代中学校の校長への充て職でした。たまたまですが、好きなど言うか、専門の英語部の部長になれたのはラッキーでした。そして、これまた偶然ですが、平成29年度から2年計画で県中学校教育研究会の英語の指定研究を十日町・中魚（津南）の中教研英語部が受けました。そして、その指導者になるよう打診があり、喜んで受けさせていただきました。本来、指導者は教育事務所等の指導主事が担うのですが、地理的に中越教育事務所管内でも十日町・中魚（津南）は南の端に位置しているのです、遠方で来てもらうのが大変だということで、私のところに回ってきました。

私は上越教育事務所に4年間いましたが、前半の2年で上越市の県中教研指定研究の指導者を、そして、後半の2年で糸魚川市の県中教研指定研究の指導者を、それぞれ担いました。そんな流れでしたので、現場に戻っても同じように中教研指定研究の指導者になるなど思ってもみませんでした。これも私の運命だとその時は思いました。私は、特に糸魚川市での研究指定を通じて、仲間と研究を作り上げる楽しさを実感していましたので、また、その楽しさを体験できると考えたら、嬉しかったです。その十日町での取組の中で、今でも強く印象に残っていることを一つ紹介させていただきます。

1年目、十日町・中魚（津南）内の各中学校（計11校）から1名ずつ代表者が出て研究推進委員会が組織されました。研究推進責任者を担ってくださったT中学校のO先生と授業者を務めるM中学校のN先生は、当初から当事者意識が高く、研究推進委員会を意欲的に引っ張ってくれましたが、他の先生方は当研究に対して明らかに後ろ向きでした。忙しいのに何でこんなことを…、

という雰囲気がアリアリでした。研究推進委員会で集まっても、借りてきた猫状態、話し合いは遅々として盛り上がりませんでした。そんなこんなで1年が過ぎていきましたが、あろうことか、頼みの綱であったO先生とN先生が異動することが分かりました。私は、研究推進に支障が生じるのではと、指導者として不安に襲われました。ただ、去りゆく研究推進責任者は責任感がある人で、1年目の締めくくりはきちんとやりました。1年目最後の研究推進委員会で、次年度の取組内容を明確にする必要がありましたので、私も指導者として、研究推進責任者のO先生との打合せに、研究推進委員会に示す2年目の方向性についての具体的なアイデアを用意して臨みました。

さて、1年目の取組の中心は、授業の始めに帯活動を位置づけて、即興的な **Speaking** 活動を継続的に、しかも、粘り強く指導することでした。具体的には、帯活動として…

- ・教師による良質な **Input (Small Talk)** を継続的に提供する。
- ・ **Chat** や **Monolog** 等の即興的な **Speaking** 活動を継続的（毎時間）に、繰り返し（**Pair** を替えて同じ **Topic** を何度も）実施する。
- ・ **Word Counter** を活用して **Word Per Minute** を算出する中で生徒の英語の **Fluency** を高める。
- ・話したことの書き起こしを通じて生徒の英語の **Accuracy** を高める。

1年目の最後の研究推進委員会で、同年の取組を通じて浮き彫りになった課題を確認しました。その結果、明らかになった課題は以下のとおりでした。

- ・ **Monolog** 等については、発話の質と量の問題がある。**Word Counter** の利用で、量はある程度確保できたが、質を高める指導、手立てが必要である。
- ・質の高い対話にはよい聞き手の存在が必要なので、よい聞き手の育成についても考えていかなければならない。
- ・ **Monolog** は即興で話す力を育成するための1つの **activity** に過ぎない。最終的にどんな活動で、どんな **Performance** を目指すのかについて、その姿を明確にして取り組む必要がある。

そして、この研究を通じて最終的にどんな活動で、どんな生徒の **Performance** を目指すのかについての **Brainstorming** を行い、その結果、以下のような仮説にたどり着きました。

2年目は、帯活動ではなくて、**OUTPUT** 重視の教科書指導で生徒に即興で英語を話す力を育成することで、1年目の課題解決に迫ることができるだろう。

そこで、授業中の教科書指導で生徒に即興で英語を話す力を育成するための活動が備えるべき要件とは何かについて、研推のメンバーで話し合いを行いました。案の定、なかなか話し合いは進みませんでした。この状況は事前に予想できたので、私は指導者の立場で、次の要件を提示しました。

- ・授業に継続した位置づけが可能であること。
- ・ペアを替えて繰り返し行うことが可能であること。
- ・語彙や言語操作に必要な文法知識の拡大が可能であること。（教科書に出てきた表現の借用や他者の話す英語からの気づきがあること）
- ・スモール・ステップで指導でき、流れに必然性があること。
- ・ **CAN-DO** リストに位置づける内容として堪えうること。
- ・生徒のレベル（個）に応じて内容が選択でき、進歩が自認できること。

以上の要件を満たしうる活動として私が提案した活動は、教科書の内容理解の後の発表活動として、学習した内容を自分の言葉で、自分の考えも付け加えながら、挿絵などを使って英語で説明する活動、つまり、教科書内容の再話（**Retelling**）でした。

2年目、先にも述べたとおり、研究推進責任者と授業者が交代しましたが、捨てる神あれば拾う神あり、新たに研究推進責任者を担ってくれた **S** 先生と授業者になってくれた **M** 先生は、ともにやる気のある方で、この人たちとなら2年目も何とかなるかなあという感触がありました。

2年目の取組としては、まず、研究推進委員会の各メンバーに如何に当事者意識を持たせるかでした。手始めに実施したことは、**Retelling** の取組を録画して、研推メンバーに見てもらうことでした。私の松代中学校の英語担当者の **H** 先生（研推メンバーの1人）とは、私の赴任早々に新指導要領の趣旨に即した即興で英語を話す力を育てる必要性において完璧に意気投合しました。彼の非凡なところは、良いと思ったことは直ぐに授業に取り入れ、粘り強く取り組むところです。授業では、しょっちゅう暇な私を呼び出して、生徒の **Speaking partner** にしてくれていました。そんな彼に **Retelling** の実践を依頼したところ、映像録画を快諾し、協力してくれました。

当時、十日町・中魚で採択されていた教科書は学校図書の **Total English** でしたが、その附属の指導資料の中に **Retelling** 用の **Worksheet** がありましたので、敢えてそれを用いた **Retelling** の取組を見てもらいました。今でこそ、**Retelling** が位置づけられている教科書は少なくありませんが、当時は、まだまだ中学校では実践例が少なく、ネットで検索しても高校での実践例がいくつか散見されるだけでした。その授業映像を見た研推メンバーは、**Retelling** について具体的にイメージできたためか、本取組の理解が進みました。

また、やる気のある人に **Retelling** を取り入れたプレ授業を実際に公開してもらいました。特に、新たに研究推進責任者になってくれた **S** 先生が、先陣を切って自身の授業を公開してくれました。**Retelling** には、事前の教科書の新出語句の意味と正確な発音の確認、導入した言語材料の十分な練習、**T/F** や **Q/A** を用いた内容、話の展開の理解、本文の音読や **Shadowing** 等の十分な練習等が不可欠ですが、生徒の取組の様子から、彼の授業は生徒の内容理解不足が否めませんでした。教科書の内容の **Retelling** というよりは、教科書の挿絵を説明する **Picture Telling** のような内容になってしまいました。ただ、驚いたのは、どの生徒も、慣れない即興的な取組であったにもかかわらず、取組の意義をよく理解していて、どの生徒も、簡単には諦めずに、粘り強く取り組んでいました。日頃の **S** 先生の指導が光る素晴らしいパフォーマンスを見せていました。

以上のような取組が少しずつ実を結び、借りてきた猫状態だった研推メンバーの取組も徐々に変化していき、2年目の9月にはどのグループ協議も、メンバーが身を乗り出して話し合う様子が見られるようになりました。その時思ったのは、もともと先生方は日々自身の授業の在り方に悩み、試行錯誤を続けているわけで、ツボにはまりさえすれば、その向上心に火を付けることができるということでした。

ここで余談ですが、新指導要領が示され、教科を問わず新たに位置づけられたその教科ならではの「見方・考え方」の解釈には、相当悩まされました。外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方の内容は以下のとおりです。

「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わ

りに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」

さて、皆さん、この内容を一読して、生徒の姿として何か具体的なイメージが湧くでしょうか。沸いた人は頭の良い人だと思います。ですが、世の中そんな頭のいい人ばかりではありません。私のような凡人は、何度も読み返してみても、具体的なイメージはさっぱり湧いてきませんでした。使われている語句はそれぞれ単体では理解できるものの、全体として、何が言いたいのか、については、全く腑に落ちませんでした。

外国語の指導担当者としては、自分の教科の「見方・考え方」についてきちんと理解していない状態で授業を行うなんてあり得ない。そう思って、何度も読み返しますが、一向にイメージが湧いてきません。ネット等で検索すれば、直ぐにヒットすると思って検索もしてみましたが、いくら検索しても、納得のいく解釈にたどり付くことができませんでした。

そこで「見方・考え方」だけに囚われず、「見方・考え方を働かせる」とは、どういうことかと考えることにしました。そうしたところ、初めて具体的な生徒の姿がイメージできました。つまり、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、既習事項や新たに学んだ事項を総動員しながら、自分の考えや思いが伝えられる適切な語彙や文法項目等について、その場で思考し、判断し、そして、表現すること」が、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせることだという結論に達しました。このように考えたら、とてもスッキリしました。今では至極当たり前のことですが、その当時（5年前）は、私は真剣に悩みました。この解釈に少なからず異論がある方もおられるかも知れませんが、当たらずとも遠からずならいいという感じなので、今でも、この解釈には自信をもっています。

十日町市立松代中学校で その2



皆さんは十日町及びその周辺で3年に1回行われている「大地の芸術祭」をご存じでしょうか。大地の芸術祭にはたくさんの外国人の芸術家がかかわっていて、外国人観光客も多数訪れるイベントです。実は、松代にはたくさんの作品スポットがあり、私が松代に赴任した2年目の夏に、大地の芸術祭が行われました。

十日町市は英語教育に力を入れており、市教委としてもこの大地の芸術祭を英語教育に生かすことを考えていました。当時、市教委で英語教育を担当されていたK指導主事は、外国人向けの観光ボランティアガイドを中学生が体験する企画を考えていて、実際に市内の中高生を対象にボランティアガイド養成講座を開設し、希望者を対象に7月から計10回の講座を行いました。残念なことに市の中心部から遠く離れたところに位置している松代の生徒は、その講座に参加することができませんでしたが、K指導主事は、実際の観光ボランティア体験を松代エリアで行うこととしてくださいました。そんなわけで、講



座にこそ参加しませんでした。年度の当初から大地の芸術祭での観光ボランティア体験を1つの目標に、計画的に即興的な表現力を生徒に育成してきた、やる気に満ちたH先生の指導により、5名の松代中生が観光ボランティア活動への参加を希望しました。

夏休みが始まって、いよいよ22日の**Guide Day**がきました。私は松代中の校長、そして、十日町市教育研究会の英語部長として、観光ボランティア隊一行と合流しました。松代中の生徒5名を含む計15名の中高生が、「松代駅」や大地の芸術祭の松代エリアの拠点である「農舞台」で、積極的に外国人観光客に声を掛け、これまで積み重ねてきた学習と練習の成果を試しました。ここで、観光ボランティア講座の参加者が、一連の講座の最後に講座の全参加者が松代中学校に訪問して行ったプレゼンの1つを紹介します。

Today I am going to talk about the Echigo Tsumari Art Treiennale which is an art festival, held every three years. The artworks are scattered around the Echigo Tsumari region, which includes Tokamachi, Tsunan, Matsudai, Matsunoyama, Kawanishi and Nakasato.

This year's theme is "Linking Nature and Men," and this theme is projected through each artwork in various ways. The artworks are installed mostly outdoors and places like closed schools, settlements, and art museums. The festival also features artworks blended into rural life. These artworks are made by both Japanese and foreign artists. The festival first took place in the year of 2000, in an attempt to attract visitors to the area which had suffered severely from depopulation. Furthermore, the Echigo Tsumari region was hit badly by the Chuetsu earthquake back in October 2004. The Chuetsu earthquake killed 39 people, injured thousands of people and damaged many buildings. This art festival aims to bring people back to the area, and involve the local population in sustainable attractions.



I, myself have looked and roamed around the artworks, and the feelings that I have felt are unexplainable. All I can say is that it was breathtakingly beautiful. In total I have visited 10 artworks and my favorite has to be the "Story of the Backside". Has anyone seen this piece before? Let me talk about this artwork. This piece was made by one of the most famous artist from China, who presented a HUGE piece where he took inspiration from famous Japanese paintings. The front side and back side of this beautiful artwork is completely different. The reason for that is that it is not even a painting (although it may seem like one)! It is a series of certain objects' shadows to form an image. It is located in Tokamachi, in a village called Kamishinden, inside an old community center. When I first saw this art piece I thought that it was just an ordinary painting, but when I looked at the backside, I was amazed to see that it was not even illustrated! I could not believe my eyes. It was astounding!

I promise you that it will be worthwhile looking at the beautiful pieces of art.

Please take some of your time to roam around the Echigo Tsumari region, and I hope it will bring a smile to your face just like it did to mine. Thank you.

今年、本来なら大地の芸術祭が行われる年に当たっていましたが、しかしながら、コロナ禍ということで、来年に延期されてしまいました。残念は残念でしたが、来年は行われると信じています。少しでも多くの皆さんに、十日町までお越しただいて、芸術作品を楽しんでいただければ幸いです。

妙高市立妙高高原中学校で

平成 31 年の 4 月から妙高市立妙高高原中学校の校長となりました。上越市の自宅から距離にして片道およそ 33km の準へき地に位置する全校生徒 80 名の小規模校です。ここで、妙高高原中の特徴について少し触れさせていただきます。妙高市は、長野県との境に位置し、私が勤務している妙高高原中学校は、いわゆるリゾート地にある学校です。昨年からのコロナ禍により観光客の数は激減しましたが、本来、通年で観光客が多数訪れ、夏は駅伝の合宿地として箱根駅伝で有名な大学のほとんどは、妙高高原で合宿を張ります。冬はスキーのメッカとして、県内外、また、海外からも多くの観光客が訪れます。私が初めて赴任した年の冬に生徒の校外学習に同行して、赤倉観光スキー場へ行った際には、スキー客の 7 割以上は外国人でした。特にオーストラリアからのスキー客が多いのが妙高高原の特徴です。また、当地に根付いている外国人も少なくなく、廃業した温泉旅館等を買収して、新たに外国人向けの宿泊施設として開業しているケースが多いです。いわゆるインバウンドが進んでいて、そういう意味でも、外国語教育が特別な意味を持っている地域であります。

そういうわけで、妙高市は独自にネイティブの外国語活動コーディネーターを配置し、園、小、中の 11 年間のスパンで外国語（英語）教育に取り組んでいます。妙高市の英語教育の特徴は、実生活に役立つ英語を身に付けさせるには、幼児のうちから英語に慣れ親しむことが重要であるということで、保育園や子ども園で計画的に「まねる」こと「楽しむ」ことを目的とした外国語活動（英語タイム）を実施していることです。私も立場上何度となく参観させていただきましたが、子どもたちは楽しみながら、笑顔で英語遊びをしていて、その有効性は高いと実感しています。今年度新たに ALT を増員し、これまでモデル的に市内 2 つの園で英語タイムを実施してきましたが、次年度からは英語タイムを実施する園の数を大幅に増やす予定と聞いています。

妙高市が英語教育に力を入れていて、園での英語教育が進んでいることには既に言及しましたが、それを受けて、昨年度から市教育研究会の英語・外国語活動部には、すべての小・中学校の担当者のみならず、すべての園からも担当者が部員になっています。園、小、中という幅広い発達段階の子どもを預かる校種の部員が一堂に集う部会ということで、どんなねらい（研究主題）を設定して、どんな活動をすべきか、とても悩みました。そして、導き出した結論は、以下のとおりです。

先にも述べましたが、妙高市教委にはネイティブの外国語活動コーディネーターがいます。この K コーディネーターが主導して、昨年度、市の「外国語活動推進委員会」が、独自の小学校外国語及び外国語活動のカリキュラムを作成しました。当然のことながら、その内容は新学習指導要領の趣旨と合致しており、合わせて、園の英語タイムの内容との整合性もよく取れています。しかし、作ったのはいいが、その活用をどう促進させるかが、大きな課題となりました。市教育委

員会からもその活用促進に係る相談を受け、私が主導する市教育研究会の英語・外国語活動部としては、市の外国語活動推進委員会のねらいと、ねらいを同一にし、「使える英語力の育成を共通目標とした園・小・中の連続性のある指導の工夫」としました。このねらいの下、園と小学校は市外国語活動推進委員会作成のカリキュラムを活用した実践を通じて、また、中学校は、即興的な言語活動を継続的に指導する取組を通じて、ねらいに迫ることとしました。そして、夏の一斉研修会では、園・校の代表から実践発表を、秋の一斉研修会では、小学校と中学校の代表から授業公開をしていただきました。ちなみに中学校では、本校が授業を公開しました。授業後の協議会の途中で、私は「課題や言語活動にどう目的や場面、状況等を入れるか」という視点で課題作り演習を行いましたので、その内容を紹介します。以下は、その時のプレゼン資料と私の発言の大まかな内容です。

<p style="text-align: center;">【グループでの課題作り演習】</p> <p style="text-align: center;">課題や言語活動に、 目的や場面、状況はどう入れるか</p>	<p>学習指導要領 外国語の目標</p> <p>「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり、表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成すること」</p> <p>外国語の見方・考え方とは</p> <p>「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方であり、その見方・考え方を働かせるとは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、その場で、生徒が適切な言語材料等について自ら考え、判断し、表現すること」</p>
--	---

「学習指導要領の外国語の目標は、小学校、中学校、高等学校の発達段階の違いはありますが、基本的には同一です。つまり、『外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成すること』です。では、外国語の見方・考え方とは何でしょうか。外国語の見方・考え方とは、『外国語のコミュニケーションにおける見方・考え方』であり、その見方・考え方を働かせるとは、『コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、その場で、生徒が伝えたいことを表現する上で適切な言語材料等について自ら考え、判断し、そして、表現すること』です。」

<p>課題や言語活動に必要な条件とは</p> <p>「生徒がコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる授業にするためには、授業で扱う課題や言語活動に、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を入れる必要がある」</p> <p><small>【本時の課題】 今まで学んだ英語を用いて、この夏に行われた「東京2020」で活躍した日本人アスリート当ててクイズを作って、ペアで、即興で出題し合うクイズ大会をします。その際、あなたのペアになる人が興味のある競技種目や実際にテレビで観戦した種目等について事前に情報収集し、その相手の興味・関心に応じた問題にしましょう。</small></p> <p><small>目的：今まで学んだ英語を用いて、人当てクイズを作って、ペアで、即興でクイズを出したり、答えたりして、英語でクイズを楽しむことができる。</small></p> <p><small>場面：出題者は東京2020で活躍した日本人アスリートを題材にクイズを考え、英語でヒントを出す。解答者はヒントを聞いて、その日本人アスリートが誰かを当てる。</small></p> <p><small>状況：クイズに答える相手（聞き手）が興味・関心のある競技種目や実際にテレビで観戦した競技種目に係る人物をクイズの題材とし、その人の情報をネット等で収集し、それを用いてヒントを作成する。</small></p>	<p>「私たち外国語指導担当者は、児童生徒がこの見方・考え方を働かせることのできる外国語の授業を作らなければなりません。そこで大切なことは、『授業で扱う課題や言語活動に、目的や場面、状況等を入れる必要がある』ということです。</p>
---	--

それでは、課題や言語活動にどのようにコミュニケーションを行う目的や場面、状況等を入れればいいのか、具体例を見てみましょう。この課題は従来よく出されていたタイプの課題ですが、これに、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を入れてみます。

<p>例にならってあなたが今までに行ったことのある場所とその感想を書きましょう。（言語材料は、be動詞の過去形）</p> <p>例） I went to Tokyo Sky Tree. It was fun.</p> <p>ここに、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を入れてみます。どのような目的、場面、状況等が入れられるでしょうか。例えば、</p> <ol style="list-style-type: none"> ①「新しく来たALTが買い物に行きたいと言っています。みんなのおすすめのお店を紹介しましょう。」 ②「中学2年生から修学旅行でどこがよかったか尋ねられました。みんなのおすすめの場所を紹介しましょう。」 ③「近所に外国人が引っ越してきました。町のおすすめの場所を紹介しましょう。」 <p>このように目的や場面が入ることにより、児童生徒に相手意識が芽生え、何を選択すべきかを考えるようになります。</p>

①新しく来た **ALT** が買い物に行きたいと言っています。みんなのおすすめのお店を紹介しましょう。

②中学2年生から修学旅行でどこがよかったか尋ねられました。みんなのおすすめの場所を紹介しましょう。

③近所に外国人が引っ越してきました。町のおすすめの場所を紹介しましょう。

このように目的や場面が入ることにより、児童生徒に相手意識が芽生え、何を選択すべきか考えるようになります。

○新しく来たALTの先生が週末にどこかに行きたいと言っています。みんなが行ったことのある所で、よかった所を例にならって、理由も書いて教えてあげましょう。

例) **I went to Mt. Myoko last year. It was great.**

目的：みんなが行ったことのある所で、よかった所を例にならって、理由も書いて教えてあげましょう。

場面：新しく来たALTの先生がゴールデンウィークにどこかに行きたいと言っています。

I went to Imori pond last month. It was beautiful.
I went to Naena Falls last week. It was nice.

状況：ALTには、3歳と5歳の子どもがいます。

ここで実際に目的や場面を入れた課題を示しますので、一緒に分析してみましょう。

例) 新しく来た **ALT** の先生が週末にどこかに行きたいと言っています。みんなが行ったことのある所で、よかった所を、例にならって、理由も書いて教えてあげましょう。

さあ、この課題の目的や場面、状況は何でしょう

うか。具体的に確認します。

目的：「みんなが行ったことのある所で、よかった所を例にならって、理由も書いて教えてあげましょう。」

場面：「新しく来た **ALT** の先生が週末にどこかに行きたいと言っています。」

この課題には、状況については特に示されていませんが、もしも、状況として「**ALT** には3歳と5歳の子どもがいます」と付け加えられていれば、子どもでも楽しめる場所を児童生徒は考えるでしょう。

それでは実際に演習として、従来型の課題に、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を入れてみましょう。

演習題はこうです。「例にならって、あなたが買いたいものとその理由を書きましょう。」

この課題にコミュニケーションを行う目的や場面、状況等を入れるとしたら、あなたはどのような目的や場面、状況等を入れますか。

ポイントは「自分のためではなく、誰か他の人のために買いたいというストーリーにすること」です。それによって、児童生徒に明確な相手意識が芽生え、何を選択したらいいのか、深く考えるようになります。

実際のコミュニケーションには、必ずそれを行う目的や場面、状況があります。私たちは無意識のうちにそれを意識して、コミュニケーションを図ります。授業中の課題や言語活動にも、できるだけコミュニケーションを行う目的や場面、状況を入れることで、児童生徒がコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる授業にすることができます。

最後に

最後に日頃考えていることや36年間の英語教員生活を振り返って、雑感を述べます。私は、あなたのアイデンティティーは何ですか、と問われれば、躊躇なく英語教師と答えます。思えば中

【演習】

例にならって、あなたが買いたいものとその理由を書きましょう。(言語材料は **want to ~ ~したい**)

例) **I want to buy a game soft. It is interesting.**

この課題にコミュニケーションの目的や場面、状況等を入れるとしたら、あなたはどのような目的や場面、状況等を入れますか。

ポイントは「自分のためではなく、誰か他の人のために買いたいというストーリーにすること」です。それによって児童生徒に相手意識が芽生え、何を選択したらいいのか、深く考えるようになります。

学2年の時、私を担当し、英語を教えてくださいました今は亡き恩師、高波恒雄先生に出会わなければ、私は英語教師になってはいなかったと思います。高波先生のおかげで、英語が好きになり、得意になり、今の私があると思います。正直、英語が得意なこと以外には取り柄がなかったので、自分にはこれしかないと思って、今まで生きてきました。

高校時代、英語の授業だけは、いつも真剣に取り組みました。数学や理科は赤点すれすれだった私も、英語だけはいつも上位でいられました。その頃から将来の職業は英語教師しかない決めていた私は、大学も文学部英文学科だけを受験しました。運良く大学に合格し、好きな英語を学べる喜びを日々感じながら、4年間学ばせていただきました。ただ、在学中に受けた教員採用試験で現実の壁にぶち当たりました。面接試験を英語で受験せねばならなかったのですが、大学時代、外国人コンプレックスだった私は、外国人講師の授業を最小限に履修してきたこともあって、英会話が全くできませんでした。そのため、案の定不合格。その経験をバネに、会話力を徹底的に強化しました。その甲斐あって、翌年何とか合格を果たすことができました。

教員になってからしばらくは、日々の授業をこなすことに専念していましたが、10年目に転機が訪れました。上越教育大学大学院の修士課程で2年間、英語教育を学び直す機会をいただきました。そこでの学びは私の教師人生のまさに宝で、今でも同大学の英語教育学会に顔を出させていただくのが楽しみです。その後、18年目に文科省の教員海外派遣事業に6月間（前半の2カ月間はコロラド州のボウルダーにあるコロラド大学ボウルダー校付属の語学研修所で、後半の4カ月はオハイオ州のオハイオ州立大学で）参加させていただきました。22年目には市教委で英語担当の指導主事を、28年目には教育事務所で英語担当の指導主事を、それぞれ努めさせていただきました。校長になってからは、32年目から現在に至るまで、県中教研の全県英語部長を務めさせていただいています。

このように、英語好きが高じて、英語教員として様々な貴重な経験をいただき、本当に幸運だったと思いますし、このことについては感謝の気持ちしかありません。そして、いただいたご恩は、今後何らかの形で返さなければと思っています。その方法については、現在思案中ですが、再び授業で英語の指導に携わりたいという思いが日に日に膨らんでいます。そして、教員生活最後のこの年に、1年生の新指導要領の趣旨に即した授業に深く関わらせてもらっています。自身のアイデンティティーを日々実感しながら…。



以上で、私の英語教育雑感を閉じさせていただきます。短い間でしたが、貴重な経験をさせていただききっかけを作っていただきました北條先生、飯島先生、そして、すべての関係の皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございました。上教大万歳！

編集後記

本号の巻頭では、渡邊政寿先生と瀧澤典子先生に着任の抱負を寄稿していただきましたが、お二人とも教育現場の経験が豊富で、元高校教師の私としては共感しつつ読ませていただきました。また、院生の皆様の原稿からは現場での実践的な取り組みに力点が置かれるようになった現在の大学院の様子がうかがえました。私が在籍した時代とは大学院の名称もカリキュラムの内容も大きく変化していることが感じられました。ところで、残念ながら、本号が最終回となる重野準司先生の連載記事ですが、中学校長としての日々を振り返る大作です。校長になられてからも英語教師として地域の教育に関わり続ける姿勢、そして、教育への情熱が行間に感じられる熱い文章であると思いました。

さて、このニューズレターは2009年の第1号発行から10年以上が過ぎ、本号をもって25号となりました。上越英語教育学会の活性化の一助になればとの思いから、このニューズレターの発行を提案し、本号に至るまで担当させていただきました。高等学校での生徒指導と大学受験のための課外授業の繰り返しの毎日に、英語教師として満たされない思いを抱いていた私にとって、上越教育大学大学院への内地留学はやっと手に入れた学問再開のためのチャンスでした。上越での2年間、そして友人や恩師との出会いにより、私の価値観と生き方は大きく変わるようになりました。皆様も上越での日々の中で、貴重な体験をされていることと確信しています。

最後になりましたが、本号に寄稿して下さった瀧澤典子先生には編集委員に入ってくださいことになり、次号からは私に変わり編集担当として実務を担っていただくこととなります。既に本号の編集に参画して下さり、上越教育大学のキャンパス風景をお送りくださいました。次号から、このニューズレターは瀧澤先生の編集により新たな歩みを始めますので皆さまのご協力をお願いいたします。

(編集委員 H. I.)



2021年12月20日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

瀧澤典子(上越教育大学)

野地美幸(上越教育大学)

北條礼子(上越教育大学)

飯島博之(埼玉県立大学)
